

「幸せ天国」北欧の謎

ノルウェーの聴覚障害者施設、 コンラッド・スベンソン・センター訪問記

柴谷 晋 コピーライター/ライター



海に面した高台に建つコンラッド・スベンソン・センター

■この違いは何なのか？

ノルウェー・オスロ国際空港を出ると、夏の太陽は灰色の雲に隠れていました。外は涼しく、8月にもかかわらず人びとは長袖姿です。

ノルウェーの首都オスロ。ここから車で20分ほど行ったところに、私の友人であるグリーさんが勤める施設があります。コンラッド・スベンソン・センター。聴覚障害者用の入所授産施設です。ここは Signo(発音は「シグノ」、英語の Sign, つまり手話の意)という民間組織によって運営されています。

駐車場の前には美しい緑の芝生。その中央に瀟洒な2階建ての建物。

「この辺りは海に面していて眺めがいいし、街にも近いでしょう。だから人気があるの」とグリーさん。

施設というよりも、リゾート地のホテルといった趣の建物に入ると、正面の窓から海が見えます。右手には食堂。シンプルな木製のテーブルと椅子が並んでいて、落ち着いた雰囲気。電気はついていないのに、とても明るい。海が見える窓がいくつもあり、壁やカーテンはパステルカラーで統一されていました。日本の障害者施設ではお目にかかれない、美しくデザインされた建物です。

北欧はこれで3回目。イギリスやフランスに比べれば、北欧諸国に華々しい歴史があるわけでもない。有名な産業も聞かないし、人口だって少なそう。経済的には日本のほうが恵まれていそうに見える。ところが、現実はずいぶん違います。北欧人たちの家はどれも美しく、そして大きい。公務員も会社員も厳密な7時間半

労働で、夕方4時には帰宅する人も多い。さらに有給休暇は年に6週間。

一体なぜこれほどの違いが生まれるのでしょうか。

■かつての北欧は貧しかった

ルネ・バードセン施設長にこの施設の設立について聞きました。

「ここは1897年にある一人の聾者の神父により設立されました。コンラッド・スベンソン神父です。彼はノルウェー中を視察し、自分と同じ聾者の多くが教育も知識もないという現状を知りました。そこでキリスト教的信仰と教育を与えるために、彼らと呼び寄せたのです。当初は、2~4週間の滞在の予定でしたが、多くの人はその後も残ることになります。なぜなら彼らの故郷の家は貧しく、教育を受けることはできないからです。家に戻っても彼らには未来がなかったのです。しかしここなら、肉体的労働に従事するための技術を身につけることが可能でした。これが、この組織の始まりです」。

ノルウェーはお隣のスウェーデンやデンマークと同様に福祉大国として知られます。「北欧の福祉が充実しているのは、お金持ちだから」。そう考えている人は多いと思いますが、そう単純な話ではないようです。

ノルウェーが裕福な国となったのは70年代から。北海で石油が発見され、開発に着手したのです。今ではロシア、サウジアラビアに次いで世界第3位の産油国。原油と天然ガスの輸出量は、同国の輸出量の約半分を占めています。

国の財政が豊かになるにつれ、センターにも変化が表われます。

「これはスベンソン神父が始めた活動であり、行政によるものではありません。そのため1970年まではスタッフはすべてボランティアでした。今は国に認められ、税金から給料が支払われています。また当初は1か所だった施設も、今ではノルウェー全土に9つを数えるようになりました」。

■知恵で、生活の質を向上させる

ここで簡単に北欧の歴史を復習してみましょう。

「かつての北欧は、ヨーロッパでも辺境の小国でした。厳しい自然環境と欠いた資源による、貧しく暗い時代が20世紀初頭まで続きました。貧困ゆえに教育レベルは低く、スウェーデンやノルウェーでは、北部を中心に餓死者が出た地域もあり、労働口を求め数百万もの国民がアメリカやほかのヨーロッパ諸国へと移民していきます。

北欧がそうした苦汁の時代に終止符を打つことになったきっかけには、ほかのヨーロッパ諸国に比べて少し遅れて起きた産業革命があります。機械化が進むにつれ、人びとは人口や国土規模が小さく、資源が少なくとも、知恵を絞ることで生活の基盤を作り上げていけることを知ります。そして、生活水準が向上していくなか、教育にも注力し、発明や技術開発が進むなど、徐々に生活の質の向上を実現する制度と経済力をもち合わせていくのです¹⁾。

簡単に言ってしまうと、長く苦し



窓が多く、自然光にあふれ、開放的な雰囲気漂う食堂



心よくインタビューに応じてくださったルネ・バードセン施設長



大きなテーブルを囲み、手話での会話を楽しむ入居者の皆さん

い時代の経験が、現在の福祉の充実を生んだわけです。障害をもつ人であっても、ほかの国民と同じような暮らしを提供する。こうした考えが、この施設にも行き届いています。

バードセン氏に現在の支援体制について聞きました。

「ケアワーカーは 160 人います。その多くがパートタイムです。利用者は約 60 人で、敷地内に住んでいます。またショートステイとして短期的に利用する人もいます。そのほか 10～15 人ほどが近隣から通い、ここで働いて帰ります。

働くといってもそれほど難しい作業はできません。ここは聾者のための施設ですが、実はほとんどの人が聾以外の障害をもっています。また高齢者も多いので、簡単な作業を行っています。ほかにも、敷地の周りは自然が豊かですから、散歩に行くなどのアクティビティをします」。

こうした何かしらの『仕事』をすることが利用者の生活には必要だ、とバードセン氏は訴えます。さらに個室を用意することで、プライバシーと十分な居住スペースを確保することも必要だと言います。

「部屋はすべて個室です。1984 年に改築され、全員が個室を持てるようになりました。これには 100 万クローネ(約 2000 万円)かかりました。費用はすべて県と国からの支援です。現在、新たな宿泊施設を建設しています。より広い部屋を提供するためです。今の部屋は約 20 m²。これを倍以上の 55～60 m²に拡張します。ベッドルームとリビングルーム、キッチン、バスルームがつま

す。これが、ノルウェーにおける高齢者や障害者施設の平均的な広さなのです。費用はほとんど税金でまかなわれます。利用者の自己負担は食事代や電気代などごくわずかです」。

■良い生活とはなにか？

バードセン氏は「利用者に良い生活をしてもらうことが目標だ」と言います。その「良い生活」とは……。

「良い生活とは、不自由のない生活という意味とは少し違います。自分でできることは自分でする生活です。もちろん、各利用者の条件に合わせてですが。

そのためにケアワーカーは、利用者の声にしっかりと耳を傾けることが大切です。そして、ちゃんと話し合い、利用者自身に物事を決定させるのです。できる限り自分のケアは自分でしてもらう。ケアする側には辛抱強さが必須ですね」。

最後に、この施設が抱える課題について聞きました。

「私にとっては経営面が課題です。つまりお金ですね。いつもこれに頭を悩ませています(笑)。より良い運営にはやはりもっと資金が必要です。そこで県や国と交渉し、妥協点を見出そうとしています。

また将来的な懸念としてですが、この国の福祉はおそらく高齢者を重視することになるでしょう。そうすると障害者に対するケアは優先順位が低下します。10 年、20 年先には何らかの対策が必要になるはずです。とはいえ、ノルウェーは経済的に豊かな国です。彼らへのケアもできるはずだと信じています」。

■経済大国よりも幸せ大国

かつては北欧にも列強に対抗できる大国を目指した国がありました。

しかし戦争に敗れ、大国との差が広がるにつれ、その拡張路線に変更が迫られます。そこで北欧全体として「中立外交」を基本とし、小国は小国のまま、工業や農業など各国の得意分野を伸ばすことで、国際競争力をつけていくことになります。

こうした歴史的経緯は日本とも重なる部分があります。戦争に破れ、軍事大国からの方向転換を余儀なくされたこと、知恵を絞ることで経済成長を実現させたこと、教育に力を注いできたこと、などなど。

しかし、北欧の選択は「軍事がダメなら経済で」と、経済大国を目指すものではありませんでした。苦しい時代を教訓として、国民の生活の向上、そしてすべての国民が幸せに暮らすことを目指したのです。

その一方、日本が選んできた道は、どのような結果をもたらしたのか。

美しいオスロの街から、熱帯夜が続く日本に戻り、何の計画性なく作られた街並みを眺めていると、帰国の喜びは消え失せてしまいました。そして、またこれから長時間労働の日々が始まるのか、と思うと、いつの日か北欧に移住しようなどと真剣に考えてしまうのでした。

●引用文献

1) あたらしい教科書編集部：あたらしい教科書 12 北欧、プチグラバプリッシング、2007。

●連絡先：shibatani@rugby.club.ne.jp